

審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2934 号	氏名	山本 真文
審査担当者	主査	山下 典雄	(印)
	副主査	田中 法瑞	(印)
	副主査	谷脇 孝孝	(印)
主論文題目： Leakage sign for acute subdural hematoma in clinical treatment (臨床的治療における急性硬膜下血腫の Leakage sign)			

審査結果の要旨(意見)

本論文は急性硬膜下血腫の手術適応となる症例を、初期診療における造影 CT の動脈相における spot sign のみでなく、5 分後の遅延相で CT 値が増大することを臨床応用して予測しようとする研究である。本研究は著者の originality も高く、今後、より精度高めることで広く臨床応用されることが期待される研究内容である。学位論文として相応しいものと思料する。

論文要旨

急性硬膜下血腫は致死率の高い症例であり、病院到着時には緊急手術の必要性が高い症例が多い。しかしながら搬入時は血腫が少ないが時間経過とともに血腫が増大し、手術加療が必要になる症例も散見される。また、手術のタイミング次第では重度な後遺症を残す可能性が高い。

我々は造影剤の使用し、動脈相と造影剤注入 5 分後の遅延静脈相で頭部 CT をとることにより、造影剤の漏出所見を認めることが分かり、脳内血腫例ではすでに leakage sign として報告している。今回この Leakage sign を急性硬膜下血腫に応用し、血腫の増大の予測ができるかについて検討した。

当院に搬入した急性硬膜下血腫の患者 67 人に造影剤を使用した CTA を施行し、その 5 分後に再度 CT を撮影し、造影剤の漏出を確認。ハンスフィールドユニットをとり、10% 以上の上昇を Leakage sign 陽性と判断した。緊急手術を施行しなかった症例は 24 時間後に CT を撮影し血腫の増大を確認した。

保存的加療を行った症例は 35 例。9 例が血腫の増大を認めた。そのうち 8 例が Leakage sign 陽性であった。血腫の増大に対する Leakage sign の感度は 88.8%、特異度は 76.1% であった。Leakage sign が陽性だった症例はすべて受傷から 4.5 時間以内であった。Leakage sign 陰性の症例では 24 時間後に血腫の減少を認めた。Leakage sign 陽性群は転帰不良であった。

Leakage sign は急性硬膜下血腫において血腫増大や予後不良群の予測因子の可能性はある。血腫が小さくとも Leakage sign 陽性の場合には嚴重な管理が必要であり、積極的な手術は転帰を改善する可能性がある。